

2003年1月号 type掲載  
キャリアデザインセンター社「type」誌「キャリア大賞2002」  
2003年、「やりたい仕事」を手に入れる

給与はもちろん、雇用の未来さえも安泰でなくなった現在、「やりたい仕事を手に入れる」など夢物語に聞こえるかも知れない。

だが、それは違う。苦しい時代だからこそ「やりたい」キモチを大事にし、自分でキャリアを切り開くべきなのだ。会社の操り人形のままで生き残れない。

「やりたい仕事」の追及こそ、type世代が苦境を脱出する唯一の道だとお気づきだろうか？

～今の仕事に本当に満足していますか？～

今こそ自分のやりたい仕事をし、好きな事を仕事の中で実現しなければならない。それも「やりたい仕事が出来たほうがいいよね」というお気楽な段階は過ぎた。やりたい仕事こそが、ビジネスパーソンにとってキャリア育成の成否そのものを握っているのだから…。



「趣味を仕事にしてはいけない」。それがこれまで常識とされていたのには2つの理由がある。一つは仕事にすることで他社への責任感と自分への義務感が生じ、趣味を純粋に楽しめなくなってしまうこと。もう一つは懸命に働いてお金を稼ぐ動機付けとして楽しい、心地よいということが良しとされていなかったこと。加えて「やりたい事があるんですが」と提案したビジネスパーソンに帰ってくる上司のセリフは、決まって「公私混同するな」だった。

やりたい仕事が出来ない。好きか嫌いかは関係なく、会社が求める仕事をこなしてさえいれば、終身雇用と年功序列によって定年まで給与とポストで応える。それが企業社会の暗黙のルールだったのだ。

しかし、ルールを成立させていた終身雇用と年功序列はもろくも崩れ去った。今や会社は個人の雇用はもちろん、キャリア形成の責任すら引き受ける事ができない。これは、去る11月に、みずほフィナンシャルグループが大手行では初めての基本給カットを含む10%以上の給与削減と追加の人員削減策を発表した事実を見ても明らかだ。

総務省が発表した最新の労働力調査によれば、10月の完全失業率5.5%の高水準を維持し、完全失業者数は362万人と19ヶ月連続で増加した。男性の完全失業者225万人のうち、自己都合64万人に対して勤め先都合は90万人。実際は勤め先都合であっても、会社から自己都合として処理されるケースがあることを考えると、企業の人員削減が急速に進んでいることがわかる。ネットリサーチ社マクロミルの調査では、「自社で現在リストラ（人員削減や給与・賞与カットなど）が実施された」「過去に実施された」の合計は44%に達し、「従業員が多い企業ほどリストラを実施した」との結果も出た。

職場の人数が減り、収入も減少する一方、労働時間は長時間化する。労働力調査の9月末1週間の就業時間を見ると、35時間以上が増加し、特に49時間以上の就業者数は19%も増えた。つまり、ビジネスパーソンは、一人当たりの仕事量と労働時間、さらに会社や上司から求められる厳しい成果も増加するというきわめて厳しい状況に置かれているのだ。

## News Release

この状況で「会社からやれといわれた仕事」をすることほど辛い事はない。何より自分の意に沿わぬ仕事」ではモチベーションが上がらず、いい成果も生み出すことも出来ない。やりたい仕事をする。繰り返して言うが、これは理想論ではない。type世代の若手ビジネスパーソンにとっては、自己実現の手段であり、キャリア形成の必須条件なのである。

～ やりたい仕事で輝いた人が活躍した1年～

毎年、「やりたい仕事」を発見し、輝かしい成果を出している人を表彰する本誌恒例の「キャリア大賞」。第4回目を迎えた今年の受賞者は、どのようなキャリアの持ち主なのだろう？

栄えある本年度のキャリア大賞は、吉本興業 財務戦略室長中多広志氏に決定！

中多氏は、商社勤務から米国MBA留学を経て長銀総合研究所に入社。M&Aコンサルタントとなり、コンサルティング領域をメディア業界に絞ることでオンリー1となる天職を発見した。そして、天職を更に発展させる場として吉本興業を選んだ。やりたい仕事を求めて、M&A専門家が、投資銀行やコンサルティング会社ではなく、エンタテインメント業界へ。ここに新時代のエリート像が見えると、審査会で高得点が集まった。

ほかに債権ディーラーから社会責任投資の調査会社を起業した人、XML技術というコアスキルを究めた人、自分が育てた事業を会社から買い取って独立した人など、「やりたい仕事」を見事にゲットした受賞者がズラリ登場。

彼(彼女)らは、いかにしてやりたい事を見出し、どうやって仕事に結びつけたのだろうか？ 受賞者のキャリア、ヒストリーから、その様々なノウハウや方法が浮き彫りになった。

そこで見えてきたのが、彼らが常に「やりたいこと」を見つけるためのアンテナを張っているという共通項。「苦手」だと思っていたことでも、なんでも挑戦してみる事により、意外な自分の得意領域」や「やりたい仕事」を発見している人が目立つ。また、ただ趣味的に「やりたい仕事」を追及するのではなく、成果を挙げている点も共通している。

成果を出すためには、時代が求めるテーマとの整合性が必要になるが、今回の受賞者は、「社会貢献」、「企業再生」、「M&A」、「物流コンサルティング」と、まさに時代が必要としている職域で活躍している。受賞者を参考に、あなたも真剣に「やりたい仕事」を考えてみてはどうだろうか。自分が「力を発揮できること」は自分がやりたいことに他ならない。これに「世の中のニーズ」がマッチングすれば、あなたも無敵の「キャリア長者」になれるかもしれない。

## News Release

キャリア大賞 2002 準賞 オリジナルキャリア賞  
青木 正一 氏 (38歳)

(株式会社日本ロジファクトリー 代表取締役社長)

青木氏のキャリアストーリー

起業資金獲得のため、大卒後佐川急便ドライバーに  
起業の知恵をつけるために、船井総合研究所に入社  
物流部門の総合コンサルティング、日本ロジファクトリー  
設立

～ 物流業界の風雲児は元佐川急便ドライバー出身～

佐川急便のドライバーからコンサルティング会社社長へ  
。そんなユニークなキャリアの持ち主が、日本ロジファ  
クトリーの青木正一氏だ。



青木氏はもともと「学生企業家」の出身。バブル華やかなりしころに、大手企業をスポンサーに各種イベントを実施、収益を上げていた。その経験から「普通のサラリーマンになるのではなく何かやってやろう」と決意。大学4年のとき、起業を見据えてまずは資金稼ぎをと考えた。

「当時、金を貯めるならマグロ漁船に乗るか、佐川急便ドライバーになるものと相場が決まっていた(笑)母子家庭だったので、漁船に乗るわけにはいかず、じゃあ佐川だと」

こうして、青木氏のドライバー生活が始まった。

毎月、給料日は25万円信金に預金。残りを500円玉に両替し、1日500円で暮らしていた」

3年で800万円を貯めた。しかし、目標の2000万円にはまだまだ遠い。そこで発想を変え、起業に役立つ知恵が付くコンサルティング業界への転職を決意。だが、現職がトラックドライバーというハンデが。

そこで、自分のこれまでの人生と夢をとうとうと語り尽くした乾坤一擲(けんこんいってき)のPR文を作り、送りつけた。船井総研が、「ガッツを評価してくれて」、異例の入社となった。

最初の配属先は国際部。海外の小売事情の視察ツアーを企画、運営する仕事だった。やがて開発部に異動し、都市開発プロジェクトに携わる。

コンサルタントになってみると、「スターコンサルタントのサポートではなく、自分の商品を作りたい」という思いが高まり、自分ならではの強みを考えた。そこで思いついたのが運輸業界専門の「トラックチーム」。ドライバー時代に知った業界の古臭い体質がヒントになった。

「運輸業界には、顧客満足どころか営業という概念もなかった。そこでDM作成などの営業サポートの商品を作ったんです」

提案書を携え全国行脚の営業を行い、やがてチームは会社で5本の指に入る稼ぎ頭へと成長。しかし、一方で「顧客の現場に入って実行する人を派遣しないと、本当の改革は成功しない」という現実にぶち当たった。「ならば、現場のマネジメントまで責任を持つ会社を作ってしまう」と、日本ロジファクトリーを創業。

現在はシステム構築部門をはじめ、物流業界専門の人材バンクも立ち上げ、コンサルティングのほかに、執筆などで多忙をきわめる。

将来はIPOも視野に入れています。しかし、それよりも日本の物流に革命を起こす構想を具現化する事が目標ですね」